

漢語副詞の日中対照研究

——「点々」を例に——

蔡 嘉昱

キーワード：漢語、存在のあり方、副詞的用法

要 旨

本論文は、「点々」を調査対象に、中国語と日本語のコーパス資料から用例を抽出し、両言語における使用状況を考察する。調査した結果、日本語における「点々」は、もの同士の位置関係(存在のあり方)を表す表現であることがわかった。一方、中国語における「点々」は位置関係ではなく、ものがどのように存在しているか(存在様態)を表す表現であることがわかった。

日本語においては、静的事象を表す表現にしても動的事象を表す表現にしても連用修飾語として働ける。それに対して、中国語においては、動的事象を表す表現でのみ連用修飾語として用いられる。

1. はじめに

(1a)における「赤く」はサマの変化を表している。一方、(1b)における「ゆっくり」は「走る」という動きの動き方を表している。しかし、(3)の「点々」は「赤く」や「ゆっくり」とやや異なり、ものの様子の変化を表す連用修飾表現と動き方を表す連用修飾表現と考えるにくい。(3)の「点々」も、「で格」と異なっている。このように、もの同士の位置関係を状态的に扱う表現を、本論文において、存在のあり方を表す表現として捉える。

- (1) a. 花が赤く咲く。
b. ゆっくり走る。
- (2) 明日公園で遊ぶ。

- (3) 白帆が海面に点々と浮かんでいる。

存在のあり方を表す表現の1つとして、日本語における「点々」は、「ものがあちこち散在している」という意味で使用されている。「点々」は、存在によって、付与されるもののあり方を表している。中国語においても、“点点”（以下、中国語の“点点”は“”で括って表記し、日本語は「」で括って表記する）は小さいものが空間内に多く存在していることを表している。しかし、現代日本語において「点々」は副詞として使用されている一方、中国語において、一般的に“点点”は副詞の位置に立ちにくいと思われる。

- (4) 点点的漁船浮在海面上。
(5) 漁船点点地浮在海面上。
(6) 白いワタスゲが点々としている草地になっている。

『バスカビル家の犬』

- (7) 星が点々と光っている。

このように、「点々」は、現代中国語では使用されにくい用法を持っている。前田(1983a)は、漢語が和語化する現象の一つとして、「副詞化」を挙げているが、その実態については十分に解明されているとは言えない。このため、本稿は、「点々」を例に、日中両言語における存在のあり方に関する表現に注目し、コーパスから収集される用例に基づき、意味、用法、コロケーション、の3つの角度から比較・分析する。その上で、日中両言語における存在のあり方を表す表現の位置付けを考察していきたい。

2. 先行研究

2.1 空間属性を表す連用修飾表現について

「点々」は、日本語において副詞として多く使用されているため、本論文では、日本語における空間属性を表す表現について、特に連用修飾表現を論じている先行研究を中心に取り上げていきたい。先行研究から、空間属性を表す連用修飾の位置づけは微妙であることがわかった。

2.1.1 矢澤 (2008)

矢澤 (2008) は、情態修飾成分を「存在相修飾成分」・「様態相修飾成分」・「状態相修飾成分」のように分けている。それぞれ、ことのあり方・動きのサマ・もののサマを表現している。

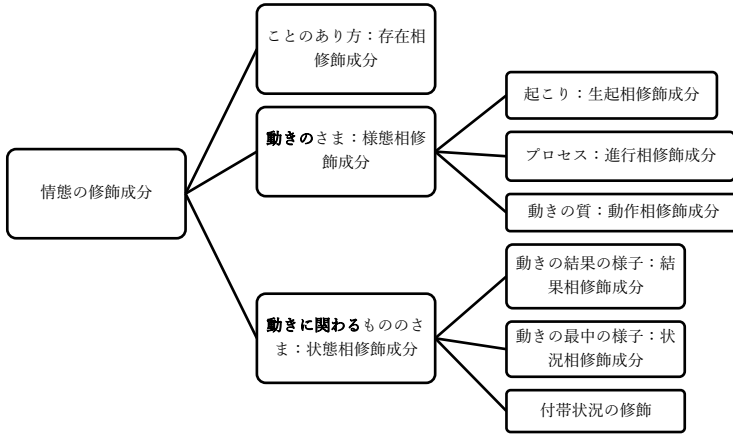


図1 情態の修飾成分

(筆者整理)

矢澤の一連の研究は、情態修飾成分を意味によって直感的に分類しているものではなく、「テイル」の制限や語順の観点から情態修飾成分を分類している。本論文で、このような分類方法に概ねに賛成する。しかし、存在のあり方を表すものの位置付けについて、矢澤 (2008) では、十分に検討されていない。

2.1.2 仁田 (2002)

仁田 (2002) は、副詞的成分について記述・分析するものである。副詞的成分の下位分類は次の通りである。

- (8) 結果の副詞
- 様態の副詞
- 程度量の副詞
- 時間関係の副詞
- 頻度の副詞

仁田（2002）は、位置変化動詞と組み合わせる連用修飾表現について、結果の副詞を取りにくく、ゆく先であると述べている。

動きの実現・終了によって、主体や対象の位置が変化するものが存する。これを<位置変化>—自動詞の場合を<位置変わり>、他動詞の場合を<位置変え>—と読んでおく。（中略）位置変化動詞が結果の副詞を取りにくいのは、動きの結果生じる変化が、主体や対象の、有り様ではなく存在位置であることによる。位置変化における主体や対象の、動きの結果後の存在位置は、通例の<ゆく先>という共演成分として出現する。

（仁田 2002）

しかし、仁田（2002）も、連用修飾成分を動きの結果として捉えることによって、結果の副詞になれる場合があると述べている。(9) は例の一つである。(9) は、掲示した結果、写真が高い位置にあると解釈できる。掲示という動きが実現した結果、写真という対象の存在位置が高いと解釈できる。

- (9) 星が点々と（茶店の老婆は）崖の端に立ってその写真を両手で高く掲示して、…

（太宰治『富嶽百景』，仁田 2002，(5)）

仁田（2002）は、位置変化動詞が取る結果の副詞は、<ゆく先>という共演成分に接近している一方、移動幅を表し、事態の内側から、事態の実現・成立のあり方を特徴づけた様態の副詞に近づいていくと指摘している。

仁田（2002）は位置変化動詞と組み合わせる空間属性の連用修飾を考察しているが、(10) のような位置変化を含意していない文や複数の者同士の位置関係を表す存在のあり方の連用修飾表現について、十分に議論されていない。

- (10) 色づいたミカンが、みどりのこい葉の中に点々と光って……。

（『クレヨン王国森のクリスマス物語』福永令三）

(10)において、「点々と」は「光る」という非位置変化動詞を修飾し、ミカンの葉の中という空間内のミカンの位置関係を表している。動きの結果ではないため、結果の

副詞とは考えられにくい。非位置変化動詞を修飾しているため、〈ゆく先〉でもないと考えられる。

2.1.3 新川（1979）

新川（1979）は、動詞と連用修飾表現の関係に基づいて、意味による連用修飾表現の分類を行う研究である。

- (11) I 規定的なむすびつき
 - 1 質規定的な結びつき
 - 2 結果規定的な結びつき
 - 3 量規定的な結びつき
 - 4 方法規定的な結びつき
- II 状況的な結びつき
 - 1 空間的な結びつき
 - 2 時間的な結びつき
 - 3 原因的な結びつき
 - 4 目的的な結びつき

新川（1979）は、「点々」を「質規定的な結びつき」の下位分類である「存在のようす」として捉える。質規定的な結びつきについて詳しく見ると、次のような下位分類が見られる。

- (12) a. 人、いきもの、物に共通する動きや変化の特徴づけ
- b. 心理的な側面
- c. 現象・知覚の明瞭さ
- d. 質＝評価的な特徴づけ
- e. 動きや変化の進行のようす、存在のようす

「動きや変化の進行のようす、存在のようす」の下位分類である「存在のようす」について、新川（1979）は次のように説明している。

- (13) <とびとびに、点々に>などは、主体が一定の距離をおいて存在していることをあらわす。

- a. 岸よりに草のはえた洲がとびとびにあるのだから、(黒 111)
- b. 納戸にも外側から幾種類もとしれぬ蛾が点々とまって、(雪 81)
- c. 畑のとおくにはなればなれにちらばっている百姓らは、(土 108)

つまり、新川（1979）は、物の空間内における存在場所と位置関係を、場所デ格やニ格に近い状況的な結びつき、あるいは、質規定的な結びつきとして扱っていると考えられる。

しかし、仁田（2002）や矢澤（2000）ですでに分析されたように、動きの進行のようすは様態の連用修飾表現だと考えられ、変化の進行のようすは結果の連用修飾表現と近い。存在のようすを様態の連用修飾表現や結果の連用修飾表現と同じ枠組みとして捉えることに問題があると考えられる。

ここまで取り上げた先行研究で、位置変化の修飾関係についていろいろ検討されたが、位置関係を表すものについて、状況を表す成分として捉える研究が見られる一方、状況成分と様態成分の両方に近い修飾成分として捉える研究も見られる。存在のあり方の修飾成分の位置付けはまだ明らかになっていないと言えるだろう。

2.2 中国語における形容詞連用修飾表現について

中国語の連用修飾についての研究において、場所を表す連用修飾を中心とする研究は多くない。朱（1982）は、前置詞句や副詞句、形容詞句、場所を表す名詞句は中国語において連用修飾表現として働けると指摘している。しかし、中国語の場所を表す連用修飾を論じている先行研究において“点点”のように、情態的な存在のあり方を表す語を扱う研究が少なく、十分に検討されていないと考えられる。本節では、中国語における形容詞連用修飾表現を全体的に扱う先行研究のうち、鄭（2000）を取り上げたい。

鄭（2000）は、「NP+A_状+VP+O」のような文を対象として、形容詞と文の各成分との統語関係、及び意味的關係を「系」と呼び、系の分類、定義と比較などについて考察する研究である。A_状と関係している文の成分の数は「系指数」と呼ばれている。系指数は最大3であり、最低は1である。そのうち、必須の関係数は1である、必須ではない関係は0個から2個である。「系」には、次のようなものが見られる。

- (14) 動主双系（動詞とかかる他、意味的に主語の位置に立つ名詞と関係する）
動賓双系（動詞とかかる他、意味的に目的語の位置に立つ名詞と関係する）

主動賓三系（動詞とかかる他、意味的に主語と目的語の位置に立つ名詞と関係する）

唯動単系（動詞のみとかかる）

- (15) 河水静静地流过张庄（鄭(2000 : 44,52)）
 (16) 张木匠大大地造了一辆二马车（鄭(2000:74, a)）
 (17) 今天，小张漂亮漂亮地穿了一套时新的西装（鄭(2000:155, 2)）
 (18) 小鸟高高地飞起来了（鄭(2000:192, 2)）

(15)は、統語的には「静静地」が動詞「流」を修飾しているが、意味的には川の状態を表している。このような連用修飾として働く形容詞は、連用修飾の位置に立つが、主語の名詞と意味的關係を持っている。形容詞と文の他の成分との関係、すなわち、系は動主双系であると述べている。この動主双系において、2種類の文が見られる。

表1 動主双系

	NP	A	VP
種類1	生物+	描人性+	動態+行為、心理、動作の変化
種類2	生物-	描人性-	動態-の存現を表す

(16)は、統語的には「大大地」が動詞「造」を修飾しているが、意味的には馬車の状態を表している。このような連用修飾として働く形容詞は、連用修飾の位置に立つが、目的語の名詞と意味的關係を持っている。この動賓双系において、3種類の文が見られる。

表2 動賓双系

	A	VP
種類1	制作の基準+	作る類
種類2	暫定性、展示性+	存現類（動態と静態に分けられる）
種類3	感知性態+	感じる類

- (19) 门前高高矮矮地栽了几棵杨柳树（静態展示）（鄭(2000), (33)）
 (20) 刚刚下过雨的马路上蹦蹦跳跳地走动着青蛙。（動態展示）（鄭(2000), (34)）

(17)は、統語的には「漂漂亮亮地」が動詞「穿」を修飾しているが、意味的には「小张」、「西装」の状態を表している。このような連用修飾として働く形容詞は、連用修飾の位置に立つが、目的語の名詞と意味的關係を持っている。

A はどのように NP や O と関係しているのかについて、前因式と後因式の二つの種類に分けられる。

- (21) 遍地的落花红红绿绿地铺成了一大片绿毯
因为遍地的落花是红红绿绿的。 NPはAである
落花铺成地毯。 NP+VP+O
所以，地毯是红红绿绿的。 このため、OはAである
- (22) 小张漂漂亮亮地穿了一套时新的西装。
因为时新的西装是漂漂亮亮的。 OはAである
小张穿西装。 NP+VP+O
所以，小张是漂漂亮亮的。 このため、NPはAである

(18)は、統語的に「高高」が動詞「飛」のみを修飾していると、鄭(2000)は説明している。唯動単系に属する連用修飾表現において、修飾成分である形容詞は程度、方式、状態を表し、NPやOと意味的關係を持たない。一方、被修飾成分であるVPは人やものの行為、心理、変化を表す動詞と、關係を表す動詞である。

鄭(2000)は、判定テストについて、A状とVPや、A状とNP、A状とOの判定テストがそれぞれ異なっていると述べている。A状とVPについては、排除法(他の成分と関係していない場合、AがVPと関係している)と補語移動法(補語の位置に移動したら自然な文になれるか否か)の2つである。A状とNP、A状とOの判定テストは、定語/述語移動法(定語/述語の位置に移動したら自然な文になれるか否か)である。

本稿で扱う“点点”、特に、単独で連用修飾語として使用される“点点”は、無目的語の文に出現している。つまり、鄭(2000)を従えば、動賓双系と主動賓三系に属する可能性がなく、唯動単系、あるいは、動主双系だと考えられる。((ア a)のような文では、下線部にある“泪水”は文全体において主語ではないが、補語節において、“泪水”は主語であると言える。)“点点”は、主語の連体修飾語の位置に移動することが可能である。そのため定語移動法から判定すると、動主双系だと考えられる。

用例（ア）に見られるように、NP は全て涙や汗などの無生物である。またそれらの用例において、“点点” が人を描写するものとは考えにくいいため、種類 2 に属するものだと考えられる。しかし、VP の“滚下”などが【静態】の存現を表すものと考えにくく、(20)に示される「動態展示」に近いと考える。つまり、従来中国語の連用修飾についての研究においても、「点々」のような存在のあり方を状态的に扱うものについてまだ十分に論じられていないと思われる。

(ア) a. 阿朱吓得泪水点点从颊边滚下。（『天龍八部』）

涙が頬から点々とこぼれ落ちた

b. 观众入场时便沐浴在点点闪烁的“星光”下…（『新華社』）

観客は入場する時に、点々と光る光を浴びている

c. 月夜漫步石径上，隐约可见月光透过松影，点点洒落小路，如雪似霜，若银赛玉。（『市場報』）

松の枝を通して差し込む月の光が点々と道に落ちたことはぼんやりと見える

(イ) a. 阿朱吓得点点的泪水从颊边滚下。

b. 观众入场时便沐浴在闪烁的点点“星光”下…

c. 隐约可见点点的月光透过松影，洒落小路，如雪似霜，若银赛玉。

3 調査方法

3.1 コーパスについて

本論文では、「点々」の現代中国語における使用実態を明らかにするために、CCL を利用する。また、「点々」の現代日本語における使用実態を明らかにするために、BCCWJ を利用する。語例の抽出には、コーパス検索アプリケーション『中納言』（BCCWJ 非 NumTrans 版 中納言 2.4）を利用した。

検索条件：(点点)~0(一) (点点)-0(头)

資料庫；現代中国語資料庫

キー条件：語彙素「点々」、

検索対象：すべてのレジスター、非コア

3.2 データの処理

本論文では、なるべく多くの用例を収集するために、CCL における検索は出現形で検索し、BCCWJ においては、非コア資料を利用した。このため、未処理のデータが多く、明らかに考察対象ではない用例は少なくない。そのため、(22) (23)に類する用例については分析対象から外した。

(23) 邻里都说陈老的胃口不错，常常见到他下午给自己买点点心吃。

(《给老爸老妈的 100 个长寿秘诀》下線は筆者による 以下同様)

(24) 週刊少年ジャンプで、「花さか天使テンテンくん」という漫画を書いていた

(Yahoo!知恵袋)

(25)における“点点”は“点点头”という動詞の一部で、“点头”(うなづく)という動作を複数回やることを意味する。(26)における“指指点点”は“指点”から派生するものと考えられ、「指差す」という動作を複数回やることを意味している。(27)における“一点点”は“一点”(「少ない」の意味で使用されている)から派生し、「極めて少ない」を意味する。これらの例における“点点”はほかの語から派生するもので、形容詞の“点点”から離れている。このため、今回の考察対象から外した。

(25) 穷人和政治家听了，都微笑着点点头……

(26) 我害怕有朝一日自己真的变成影帝时，嫉妒我的人指指点点，媒体越来越放肆，保不准哪一天就上了娱乐报的头版头条。

(27) 作为刘招华这么狡猾的人，有一点点风声都可能把他惊跑了。

4 調査

4.1 「点々」の辞書義

“点点”について、中国の辞書(『漢語大辞典』)における記述は、以下の通りである。

“点点”

1. 小而多。(空間に小さいものが多く存在している。)

2. 一点点，形容小或少。(少ない。小さい。)

(『漢語大詞典』)

それに対して、『日本国語大辞典（第二版）』には、「点々」について、次のように記録されている。

「点々」

- ①(一する)(形動タリ)点をうったように、あちこちに散在すること。また、そのさま。
 ②いくつかの点。また、俗に点線をいう。

このように、中国語において、“点点”は「空間内に小さいものがたくさん存在するさま」と「少ない、小さい」という二つの意味がある。つまり、辞書の意味記述から、中国語の“点点”は位置関係を表現せず、空間内にものがどのように存在しているのかを説明している。一方、日本語おける「点々」は「あちこちに散在する様子」を意味し、明らかに存在のあり方を表す表現に属している。

4.2 「点々」の用例数

CCLを調べた結果、“点点”は1491例が見られた。百万語あたりの用例数は1.31例である。また、BCCWJを検索した結果、「点々」は276例見られた（「点点」の使用例ではない例が31例ある）。百万語あたりの用例数は2.47例である。全体的に、日中両言語で「点々」（“点点”）の使用頻度は高くないと考えられる。

“点点”を「少ない。小さい。」の意味で使用される例はある。

- (28) 受这点点委屈就甩挑子不干了?（莫言『红树林』）

下線部：ちょっとつらい思いをする

- (29) 你怎么只吃这点点东西?（罗广斌『红岩』）

下線部：少ないもの

(28)における“点点”は、「小さい」の意味で使用され、程度を表している。(29)における“点点”は、「少ない」の意味で用いられ、食べ物の数量を表している。このような、「少ない。小さい。」の意味で使用される“点点”は、146例見られた。しかし、このような“点点”は空間内に存在している様子、あるいは、存在によって付与される状態と関係していない。また、CCLとBCCWJにおいても、名詞として使用され、「点。複数の点」の意味を表している用例も存在している。

(30) “半山上，隐隐约约的那个白点点看见了吗？”

下線部：あの白い点が見えますか

(31) 「つ」にテンテンをつける。

「点。複数の点」の意味で使用されるものも、空間属性を表すものと考えにくい。CCLから抽出した用例計273例のうち、55例(20.08%)に名詞の“点点”が見られる。名詞の「点々」(“点点”)は両言語ともよく使用される用法であるが、空間属性を表すものではないため、4節ではこれらの用例を分析しない。

5 分析

5.1 形式について

(32a) (32b)における“点点”は、名詞の「晶光」と「星光」と繋ぎ、熟語の一部と考えられる。これらの語は、前語基と後語基の順番が変化しても許与度は下がらない。

(32) a. 云天明弯腰抓起一把黑土，让土从指缝慢慢流出，下落的黑土闪烁着点点晶光[?晶光点点/点点的晶光]…(刘慈欣『三体』)

下線部：点々としている光が光っている

b. 照片粗看一片黑暗，细看有星光点点[点点星光]…(刘慈欣『三体』)

下線部：点々としている星

このため本論文では、前語基と後語基の順番を変えても許与度が下がらない場合、熟語型に分類し、順番を変えたら許与度が下がる場合、単独型に分類する。

表3 「点々」の形式

	単独型	163	17.18%
熟語型	○○X々	232	24.45%
	X々○○	219	23.08%
	疊語共起型	335	35.30%
	総計	949	100%

表 3 から見られるように、“点点”は、中国語において、①疊語共起型、②熟語型、③単独型、の 3 型が見られるが、日本語においては、単独型のみが見られる。このため、両言語における単独型を中心に検討する。

5.2 用法について

両言語における単独型の「点々」を整理する。まず中国語における“点点”の用法を表 4 に示す。

表 4 中国語における“点点”

	“点点”
連体修飾	152 (93. 25%)
連用修飾	11 (6. 75%)
述語	0
単独型総計	163 (100%)

“点点”は、単独で使用される場合、連体修飾語として働く用例が圧倒的に多く、連用修飾語として使用される用例は少ない。また、述語として使用される用例について、“点点”は一例も見られない。

そこで考察しなければならないのは、次の①②である。

- ①中国語において、空間属性を表す“点点”が連用修飾成分として用いにくい理由。
- ②中国語において、空間属性を表す“点点”が述語の一部として用いにくい理由。

次に日本語における「点々」の用法を表 5 に示す。

表 5 日本語における「点々」

連体修飾	タル	0
	トスル	2 (0. 95%)
	トシタ	0
	トシテイル	4 (1. 90%)
	ノ	0

連用修飾	ト	202 (92.66%)
	トシテ	2 (0.95%)
	φ	2 (0.95%)
	ニ	0
述語	ダ	0
	トシタ	0
	トシテイル	3 (1.42%)
	トシテイタ	3 (1.42%)
サ変動詞	スル	0
単独型総計		218 (100.00%)

表 5 から見られるように、「点々」は、連用修飾として用いやすい。中国語と比較すると、日本語は連体修飾の使用率が低く、連用修飾としての使用率が高いことは観察されている。その理由について、5.3 節に考察する。

5.3 日本語における存在のあり方を表す「点々」

- (33) 血が点々と道に落ちる。
 (34) 星は点々と輝く。
 (35) 帽檐上流下点点的水滴。(『保卫延安』)
 (36) 点点的遥山，淡得比初春的嫩草，还要虚无缥缈。(CCL 散文)

中国語における“点点”は、ものが小さく見えて、数多く存在することを表している。それに対し、日本語において、「点々」は、あちこちに散在していることを表現し、もの同士の位置関係がバラバラであることを表現する語である。つまり、日本語においても中国語においても「点々」はものがどのように存在しているかを表す表現であるが、日本語のみもの同士の位置関係を表現できる。本論文では、もの同士の位置関係を表す表現をあえて存在のあり方の連用修飾表現と呼ぶ。

位置関係を表すものを「モノのサマを表すもの」・「様態を表すもの」と区別するために、次のような素性を規定する。

【物存在性】：表現される状態において、空間内の存在状態を規定する性質

【サマ性】：表現される状態において、ものの様子を規定する性質

テストとして、次のようなテストを提案する。

(37) a. ライトが赤く光っている

ライトが(赤い/*赤く存在する) (意味一致) -非物存在性

b. 星は点々と輝く。

星は(*点々である/点々と存在している) (意味一致) -非物存在性

c. ボタンを強く押した。

ボタンが(*強い/*強く存在する) (非文) +非物存在性

d. 彼はいつも8時に起きる。

彼は(*いつもである/いつも存在する) (意味不一致) +非物存在性

(38) a. ライトが赤く光っている (ライトの様子/光り方)は赤い。+サマ

b. 星は点々と輝く。(星の様子/*輝き方は点々である) -サマ

c. ボタンを強く押した。(ボタンの押し方は強い)+サマ

d. 彼はいつも8時に起きる(*彼の起き方はいつも/*8時に起きる彼の様子はいつもである) (非文) -サマ

(37b)に示されるように、「星は点々と輝く」のような文における「点々」は、事態ではなく、星そのものが空に点々と存在していることを表現している。このように、(37ab)（「である」構文と「存在する」構文のいずれか書き換える）における連用修飾表現は、コトではなく、モノが空間内にどのように存在しているのかを表している。一方、(37cd)（「である」構文と「存在する」構文の両方に書き換えない）における連用修飾表現は、かえって物ではなく、コトの状態を表現する。本章では、前者を「+物存在性」とし、後者を「-物存在性」としている。

次に、「サマ性」について分析する。(38)に示されるように、「星は点々と輝く」のような文における「点々」は、モノのサマとして解釈できないと同時に、動きのサマとしても解釈できない。このような連用修飾表現は「-サマ性」という素性を持つと考えられる。モノのサマ、あるいは、動きのサマ（動き方）として解釈できる場合、「+サマ性」を持つと考えられる。

表6 内的属性・動きのサマ

	-非物存在性	+非物存在性
+サマ性	状態相修飾関係	様態相修飾関係
-サマ性	アのグループ（存在のあり方）	存在相修飾関係 ¹

「サマ性」と「非物存在性」から考えると、日本語における「点々」は、中国語と異なり、モノのサマとコトのサマとコトのあり方ではなく、もののあり方、すなわち、存在のあり方を表している。

5.4 「点々」の用法について—動的事象・静的事象の視点から—

(39) a. 帽檐上流下点点的水滴。(『保卫延安』)

帽子から水が点々と流れた

b. 点点的遥山，淡得比初春的嫩草，还要虚无缥缈。(CCL 散文)

(39a)は、帽子から流れた水は、雫が小さくて多いことを表現している。それに対して、(39b)は、「落ちている」もの、あるいは「光っている」ものではなく、山が遠いところに小さく見えて、数多く存在することを表している。つまり、“点点”はものが小さいこと（モノのサマ）、また、ものが空間内に多く存在していること（ものの空間属性）を表している語である。

(39a)において、“点点”で修飾されるのは、落ちる前の水の様子ではない。水の雫が次々と落ちている様子を表現している。つまり、(39a)における“点点”は、動きによってもたらす雨の状態を表現している。

このように、(1)動きの有無、(2)修飾される状態と動きの関係、の2つの視点から分類できる。(1)(2)に基づき、表現できる事象は、理論的に次のように分類される。

¹表 3-2 における状態相修飾関係や様態相修飾関係や存在相修飾関係は矢澤（2008）で主張したものである。

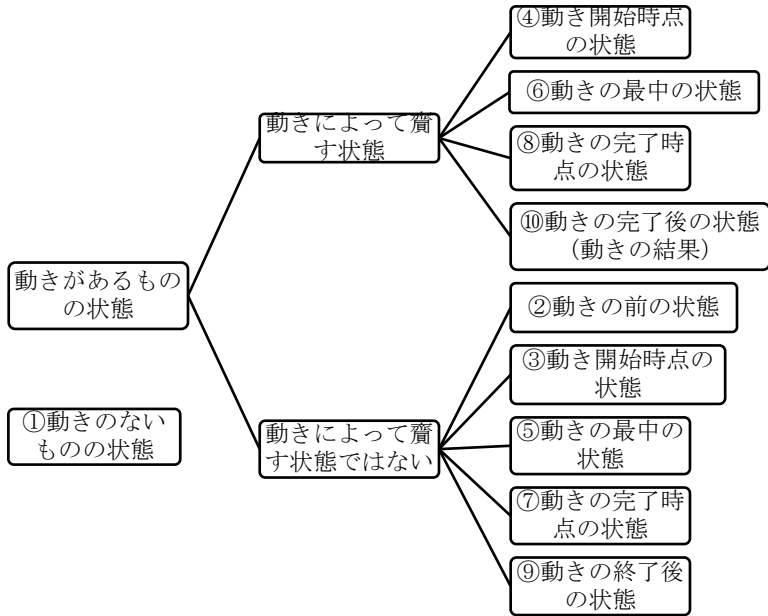


図1 状態クロス分類図

まず、修飾されるものは動きがあるか否かによって分類できる。本章では、あえて「ある・いる・存在する」などの存在表現を除いた動詞と関わるものを「動きがあるものの状態」とし、それ以外のは「動きのないものの状態」とする。例えば、(40a)における「水」は、「落ちる」という動詞と共起し、「落ちる」という動きがある。一方、(40b)における「水滴」は、存在動詞と共起し、動きのないものであると考えられる。(40c)における「帽子」と共起する動詞はないため、動きのないものであると考えられる。このような方法で、「動きのないものの状態」、「動きのあるものの状態」が分けられる。

- (40) a. 帽子から水が点々と落ちている。
 b. 帽子に水滴がある。
 c. 帽子は大きい。

動きの関与の有無を考察する上で、「有」構文や「ある」「いる」テストを用いる。次に、「点々」を例として説明する。

- (41) a. 帽檐上流下点点的水滴。(『保卫延安』)
帽子から水の雫が点々と落ちている
- b. 帽檐上有点点的水滴。
帽子に水滴がある。
- c. すでにこぼれた一寸ばかりの虫がてんでん座敷を這っている。(『戦後名詩選』)
- d. すでにこぼれた一寸ばかりの虫がてんでんとある。
- (42) a. 在天空中闪烁着点点的星光。(作例)
点々としている星が空で輝いている。
- b. 在天空中有点点的星光。
空に点々としている星がある。
- c. 湖面上漂着点点的渔船。(作例)
湖に点々としている船が浮かんでいる
- d. 湖面上有点点的渔船。
湖に点々としている船がある

(41a)は、帽子から水が点々と落ちている様子を表現している。一方、(41b)は帽子の上に水があることを表している。つまり、(41a)を(41b)に書き換えると、非文にはならないが意味が変わる。(41c)(41d)も同様である。このように、(41a)と(41c)における「点々」は、動きの関与によって出現するさまである。

一方、(42a)(42c)は、存在文に書き換えても、意味が変わらない。このように、(42a)と(42c)における“点点”は、動きの関与によって実現する存在のあり方ではないと言える。

- (43) テスト: 「有」構文や「ある・いる」構文に書き換えると自然な文になれない場合、あるいは、意味の変化が見られる場合、動きによってもたらされる状態である。

状態が動きによってもたらされるものであるか否かによって、動的事象と静的事象に分けられる。本章では、状態が動きによってもたらされる状態ではないものを静的事象と呼び、状態が動きによってもたらされる状態を動的事象と呼ぶ。つまり、①②③⑤⑦⑨は、静的事象であり、④⑥⑧⑩は動的事象である。このような方法で、「点々」の中日両言語における使用状況を考察する。

5.4.1 連体修飾表現として使用される「点々」

“点点”が単独で使用される場合、連体修飾語として働く“点点”が圧倒的に多く、連用修飾語として使用される用例は少ない。(44)は、連体修飾語として使用される用例の一部である。

- (44) a. 观众几万只手电筒的光芒,如同夜空中点点的繁星闪烁。(『新華社』)
 b. 帽檐上流下点点的水滴。(『保卫延安』)
 c. 点点的遥山,淡得比初春的嫩草,还要虚无缥缈。(CCL 散文)

中国語において、連体修飾表現として使用される“点点”には、3つの意味・用法があると考えられる。

一つ目は、光っているものを表す意味・用法である。(44a)は、このタイプの用例の一つである。二つ目は、落ちているものを表現する機能である(44b)。三つ目は、“点点”が修飾する動きのないものが空間内にどのように存在しているかを表す用法である。(44c)は、このタイプの例文で、「落ちている」もの、あるいは「光っている」ものではなく、山が遠いところに小さく見えて、数多く存在することを表している。

(44a)において、“点点”は輝いている星を修飾している。しかし、空に見られる「複数の星」は「小さく多い」という属性を持っている。一時的に星が見えなくても、すなわち、光っていなくても、地球にいる人類にとって、星は小さく多く存在する。光っているものの位置関係を表す“点点”と動きのないものの位置関係を表す“点点”は静的事象を表すものと考えられる。しかし、前に例として分析したように、落ちているものの存在のあり方を表す“点点”は、動的事象を表すものと考えられる((44b))。

次に、これらの文における“X々”の移動の実現可否を検討する。(44a)の“点点”は、動きと関係ない状態を表現している。連用修飾表現の位置に移動すると、非文にはならないが、元の文である(44a)より許容度が低くなる。このように、動きと関係のない状態を表す形容詞の連体への移動は許容度に大きな影響を与えている。

一方、(44b)における“点点”は、動きによってもたらす状態を表している。(45b)のような移動が不可能であるが、水滴が前に移動すると(45cd)、許与度が増加している。つまり、動きによってもたらす状態を表している形容詞は、中国語において連用修飾表現として働くことはできる。一方、動きの無いものを修飾している(45e)における“点点”は、連用修飾として働き、形容詞を修飾できない。

(45) a. ?观众几万只手电筒的光芒, 如同夜空中繁星点点地闪烁。

下線部：夜の星のように、点々と輝いている。

b. ?帽檐上点点流下水滴。

下線部：帽子から水が点々と落ちている。

c. 帽檐上水滴点点流下。

d. 泪珠点点滴下来了。

下線部：涙が点々としたたり落ちた。

e. *遥山, 点点地淡得比初春的嫩草, 还要虚无缥缈。

現代中国語において、動きによってもたらす状態ではない場合（静的事象として使用される場合）に、連体修飾表現として使用されやすく、連用修飾表現として使用されにくい。一方、動きによってもたらす状態である場合、連用修飾表現として用いられる。

連体修飾として使用される「点々」は、日本語では極めて少ない。そのうち、「とする」は2例で、「としている」は4例である。

(46) a. 道に点々としている赤い液体をゆびさきですくって、細井刑事がぺろぺろとなめながらいった。

(『犯人さがしで、宇宙旅行』)

b. そのさきは、白いワタスゲが点々としている草地になっている。

(『バスカビル家の犬』)

c. 点々としている無数の島々は普陀山に詣でた折の列島とよく似ている

(『道元』)

d. 半径十キロの円内に点々としている木なんです。

(『DNA 考古学』)

- e. しだれ桜の淡紅色の花が点点とするさまは、まことに優雅で可愛い。
 (『評伝平福百穂』)
- f. 小さな島が点々とする景色を眺めながら、披露宴の始まりです。
 (『ストックホルムからの手紙』)

日本語における「点々」は、もののサマではなく、ものの存在のあり方を表現している。それらの用例における「点々としている」「点々とする」は、「点々と存在している」に変化しても、許与度が変化しない。また、一時的なものを修飾する「点々」(46a)が見られる一方、恒常的なものを修飾する「点々」(46f)も見られる。

(46a)の文において、「点々」は掬うという動きを行う前の液体の存在のあり方を表現している。また(46e)の文において、「点々」は赤く咲いている花の存在のあり方を表し、眼前にある花があちこちに存在している様子を表現している。すなわち、(46a)における「点々」は掬うという動作によってもたらされる存在のあり方ではない。一方、咲いていない花は空間内にどのような様子で存在しているのかが見えないため、(46e)における花の「点々としている」さまが咲くという動きによって実現されると言えるだろう。

日本語においても、中国語と同様で、連体修飾として使用される「点々」は動きによってもたらす状態を表現できる。頻度から比較した結果、中国語は日本語より連体修飾が多く使用されている。

中国語における“点点”は日本語の「点々」と異なり、モノのサマ（小さい）も表すことができる。図に示されるように、(47)のような文で、もののサマは動きによってもたらす状態ではない場合、連体修飾として用いやすい。このため、中国語における“点点”は日本語と比較すると連体修飾で多く使用されている。

- (47) 点点的风帆漂在海中。
 点点としている船は海に浮かんでいる。

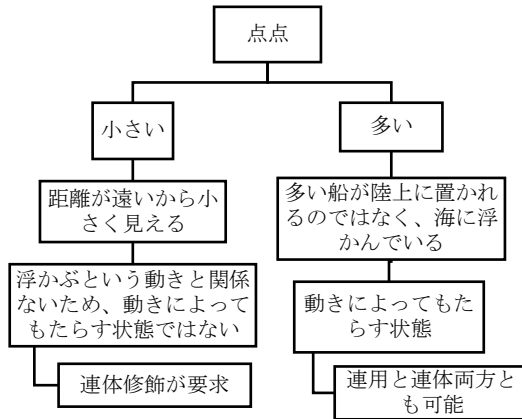


図 2(47)分析図

(46)の各例文において、「点々」で修飾される被修飾対象は、必ずしも存在物であるわけではない。(46a)において、「点々としている」の後ろに出現する「赤い液体」は、存在物である（「赤い液体が点々としている」）。一方、(46b)において、「点々としている」の後ろに出現する「草地」は、存在物ではなく、点々としているワタスゲの存在場所である。（草地にある白いワタスゲが点々としている）。

中国語は、日本語と異なり、連体修飾語として使用される“点点”の被修飾語は、必ず存在物である（66 例のうち、66 例である）。これも、“点点”が存在のあり方だけでなく、モノのサマも表すことと関係している。

5.4.2 述語用法について

日本語において、述語として使用される単独型の「点々」は極めて少なく、「としている」と「としていた」の形を持っている。この点で、日中両言語において、同じ傾向が見られる。中国語において、単独で述語として使用される“点点”は 1 例も見られない。

(48) a. そのところどころに戦争や社会不安、貧しさが点々としていた。

（『過ぎ去りし日々の光』）

b. 脱衣場のドアは開け放たれ、廊下には水滴が点々としていた。

（『ラジオ・エチオピア』）

- c. 車で向かう途中、街道筋に古い館や家が点々としている。
（『ヴェネツィア的生活』）
- d. エジプト人やアラブ人用のカラフルな休暇村が点々としている。
（『エジプト』）

連体修飾用法と述語用法で使用される「点々」の用例が少ないことは、日本語において、「点々」が形容詞として認定されていないことを反映している。これらの用例における「点々」は、連体修飾と同様に動きのないものを修飾し、静的事象を表現している。

中国語において、“点点”で修飾される語は「小さい」という素性を持たなければならない。しかし、日本語には、このような制限が見られない。このため、中国語に訳す場合、そのまま“点点”に訳すことは不可能になっている。モノのサマではなく、存在のあり方のみ表す語（例えば、到处など）に訳しなければならない。

- (49) a. エジプト人やアラブ人用のカラフルな休暇村が点々としている。
（『エジプト』）
- b. 埃及人和阿拉伯人的度假村到处都是。

日本語における「点々」は、「点々と存在している」という意味を含意している。このため、用法にかかわらず、「点々」が使用される場合、「点々と存在している」と書き換えることはできる。

- (50) a. 脱衣場のドアは開け放たれ、廊下には水滴が点々としていた。
（『ラジオ・エチオピア』）
- b. 脱衣場のドアは開け放たれ、廊下には水滴が点々と存在している。

述語として使用される場合も、存在表現の動詞が含意されている。このような矛盾があるため、モノのサマを表さない「点々」は述語として使用されにくい。日本語の「点々」だけではなく、両言語におけるもの同士の位置関係を表す表現は、述語用法を持ちにくいと考えられる。

中国語における“点点”は、ものがどのように空間に存在しているか(存在様態)を表す表現であるが、もののサマも表現できる。それ故、“点点”が述語として働ける

はずである。実際は、“点点”で修飾できるものは限られている。このため、「名詞+点点」のような典型的な形容詞述語文における名詞が繰り返し出現し、「〇〇X々」型熟語になりやすく、述語として使用される“点点”は見られない。

(51) 白帆点点/点点白帆

5.4.3 連用修飾用法について

(52)の用例は「点々」が動詞にかかっている用例である。これらの用例をみると、多くの場合、“点点”は意味的に主語の位置にある名詞を修飾している。11の用例に出てくる動詞は大きく2種類に分けられ、(52acdefghk)の8例は、「落ちる類」に分類することができる。それに対して、(52bij)の3例は「光る類」に属している。

(52) a. 阿朱吓得泪水点点从颊边滚下。(『天龍八部』)

下線部：涙が頬から点々とこぼれ落ちた

b. 观众入场时便沐浴在点点闪烁的“星光”下…(『新華社』)

下線部：観客は入場する時に点々と輝く光を浴びている

c. 月夜漫步石径上，隐约可见月光透过松影，点点洒落小路 (『市場報』)

下線部：松の枝を通して差し込む月の光が点々と道に落ちたことはぼんやりと見える

d. 大粒大粒的汗珠，点点往下淌。(『作家文摘』)

下線部：汗が点々と滴り落ちた

e. 雨点点打身、心尖尖冷…(『人民日報』)

下線部：雨が点々と体に当たって、心も冷たくなっている

f. 轻风起来时，点点随风飘散…

下線部：花が風に点々と落ちた

g. 说到‘段公子’这三个字时，珠泪点点而下…(『天龍八部』)

下線部：涙が点々とこぼれ落ちた。

h. 悲慘的往事听得台下的日本人一个个掩面而泣，泪水从手指间点点滴滴落，

(『1994年報刊精選』)

下線部：指の間から涙が点々とこぼれ落ちた

- i. 湖水在遥远处点点闪烁忽长忽圆忽平忽仄。
下線部：湖の水は遠くに点々と光っています。
- j. 冰刀溅起的冰沫在阳光下点点闪烁。
下線部：氷が太陽の下で点々と輝いている
- k. 晶莹水珠，在沉静的空室中，点点滴滴落。（『朱邦复巴西狂欢节』）
下線部：きらきらとした水滴は、静かな部屋で点々と落ちる

「光る類」の動詞は「光る」「輝く」の意味をもっている語である。“点点”は輝いた後のもの（星や光など）の様子ではなく、輝いている期間内に星が小さくて、たくさん存在していることを表している。前の分析に従えば、「小さく多い」という状態が「光る」という動作にもたらす状態ではないと考えられる。光っていなくても、湖に小さい水滴がたくさん存在している。このため、「光る類」の“点点”は静的事象を表現している。しかしこのような用例は極めて少なく、(52j)(52i)も同じ文章で出現し、作者と強く関係していると考えられる。

「落ちる類」の動詞は下に落ちるという意味をもっている語である。「落ちる類」の“点点”は、落ちた後や落ちている途中の雫が小さく多く存在することを表している一方、涙や汗などの落ちているものが次々と出現することを表現している。「落ちる類」の“点点”は、空間の存在様態とモノのサマだけではなく、時間枠の中で捉えられる。

(53) (52d)の解釈

A 汗の雫が次々と落ちている。

B 一瞬で顔にある汗の雫は小さくて多く存在している。小さく多いことは流すによって実現する。

大粒大粒の汗珠，点点往下淌。（『作家文摘』）

下線部：汗が点々と落ちている

大粒大粒の汗珠，点点存在。（非文）

下線部：汗が点々と存在している（意味不一致）

連用修飾語として使用される“点点”について、①現代中国語において、連用修飾語として使用される“点点”が使用されにくく、かなり制限を受けていること、②静的事象を表す表現が連用修飾として使用されにくいこと、の2点が見られる。

一方、中国語とは異なり、日本語においては連用修飾用法を持つ「点々」が「あちこち散在している」の意味で最も使用されやすい。

(54) a. 積んでいたダンボール箱などはあちこちに放りだされ、中味の食料が点々と落ち(ている)。

(『マンダラ探険』)

b. すでにこぼれた一寸ばかりの虫がてんでん座敷を這っている。

(『戦後名詩選』)

c. 冬に荷櫓で運び込んでいた積み肥を畚で担ぎ込み、田のあちこちに点々と置く。

(『流れる雲と野と人の賛歌』)

d. 犯人がいて、人形の真上の花瓶かなんかから、雨だれのように、点々と水が滴る仕掛を作っておいたのだ。

(54a)における「点々」は「あちこちに散在している」の意味で用いられ、落ちた食料が点々の状態で残されることを表現している。「ていく」のような進行を表す表現に書き換えられないため、「点々」は落ちた後の位置関係を表す語と考えられる。静的事象と動的事象の視点から考えれば、(54a)における「点々」は動的事象を表現している。食料品の位置関係は、「落ちる」という動きによってもたらされる。

(54b)における「点々」は、虫がどのように這っているのかを説明している連用修飾表現とは考えにくく、這っている途中の虫の様子を表す表現でもない。「点々」は、「あちこちに散在している」の意味で用いられ、「虫たちが点々と存在している。これらの虫が座敷を這っている」ことを表す語だと考えられる。これらの「点々」で表現されるのは、動きによって付与される存在の在り方の変化ではなく、這うという動きの続く期間内におけるものの存在の在り方である。静的事象と動的事象の視点から考えれば、(54b)における「点々」は、静的事象を表現している。

(54c)における「点々」は、「あちこちに散在している」の意味で用いられ、動きのない積み肥を修飾し、積み肥がところどころに置かれることを表現している。つまり(54c)における「点々」は、静的事象を表している。

(54d)における「点々」は、水の滴り方を表現し、様態を表している。

表7 「点々」の連用修飾用法

		動的事象	静的事象
点々	日本語の連用修飾	○	○
	中国語の連用修飾	○	×

表7から見られるように、中国語においては、静的事象を表す表現は連用修飾として使用されない。一方、日本語においては、静的事象と動的事象を表す表現両方が連用修飾として使用できる。比較すると、日本語の連用修飾用法が広い範囲で使用されることが分かる。

5. まとめ

本論文では、「点々」を例に、日中両言語における存在のあり方表現に注目し、コーパスから収集される用例に基づき、意味、用法、コロケーションの3つの角度から比較・分析した。

調査の結果、「点々」について、①中国語の“点点”が存在のあり方を表す連用修飾表現だけではなくもの様子（小さい）も表現しているが、それに対して、日本語の「点々」は「小さい」という意味がないこと、②中国語の“点点”が連体修飾として多く使用されている一方、日本語の「点々」は、連用修飾として使用されていること、この2点が観察された。中日両言語における用法の違いが生じた理由は、両言語における連用修飾表現に対する制限が異なるからである。日本語においては、静的事象を表す表現にしても動的事象を表す表現にしても連用修飾語として働く。それに対して中国語においては、動的事象を表す表現のみ連用修飾語として用いられる。

しかし、このような特徴が他の連用修飾表現に見られるか否かについては、更なる検討を進める必要があると考えられる。

参考文献

- 国広哲弥 (2005) 「アスペクト認知と語義.日本語の様態副詞と結果副詞を中心として」『副詞的表現をめぐって』武内道子[編]ひつじ書房. pp99-123.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』. 大修館書店.
- 新川忠 (1979) 「副詞と動詞とのくみあわせ」試論『言語の研究』言語学研究会[編]むぎ書房.

- 新川忠 (1996) 「副詞の意味と機能—結果副詞をめぐって」『ことばの科学 7』言語学研究会[編]むぎ書房.
- 刘月华 (1982) 状语与补语的比较, 《语言教学与研究》第 1 期.
- 刘月华・潘文娉・故麟 (2001) 《实用现代汉语语法增订本》. 北京: 商务印书馆.
- 朱德熙 (1956) 现代汉语形容词研究, 《语言研究》第 1 期.
- 郑贵友 (2000) 《现代汉语状位形容词的“系”研究》武汉: 华中师范大学出版社.
- 仁田義雄 (1983) 「結果の副詞とその周辺」渡辺実編『副用語の研究』明治書院.
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』. 東京くろしお出版.
- 矢澤真人 (2000) 「副詞的修飾の諸相」仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人著『日本語の文法 1 文の骨格』岩波書店.
- 矢澤真人 (2008) 『日本語情態修飾関係の研究』筑波大学博士学位論文.

サイ カイク／人文社会科学研究所
(2021 年 9 月 14 日 受理)